

令和元年6月29日現在

機関番号：34319

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02232

研究課題名(和文)世阿弥能楽論に投影する室町将軍家周辺の文芸・学術・思想

研究課題名(英文)The Literature, Scholarship, and Thought around the Muromachi Shogun Family which are Reflected on the Noh Treatises by Zeami

研究代表者

重田 みち (SHIGETA, Michi)

京都造形芸術大学・芸術学部・非常勤講師

研究者番号：40399069

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、世阿弥が身を置いた足利将軍家周辺の文芸・学術・思想に注目し、世阿弥能楽論に当時の禅の思想、儒学その他の中国古典、平安朝漢文学などの内容が多分に投影していることを多くの事例を指摘して明らかにし、またそれが世阿弥の重要な芸道思想の形成につながっていることを突き止めた。さらに、その世阿弥の芸道思想を育てた当時の京都の社会の学術・教育環境や、将軍家文化圏における美の在りかたの意味を考察し、特に足利義持政権期が以後数世紀にわたり継承された武家文化に特徴的な思想や美意識の発端と位置付けられる、日本文化にとって注目すべき時代であるという、以前からの自身の認識を他面からも補い強める結論を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国内外で高く評価される世阿弥の演劇論や芸道思想に、禅だけではなく大陸由来の学問・思想の影響の跡が多々見出され、その芸道思想の形成にきわめて重要な役割を果たしていることを具体的に示して従来の認識を一新し、世阿弥能楽論の理解を深める画期的な成果を得た。また、世阿弥がその学問・思想を学びえた足利将軍家の周辺の学術・教育環境や美の在りかたと、以後近世を通じて継承された武家文化の美意識との関係について、世阿弥能楽論をもとに展望することができた。同時に、米国・中国・台湾等の研究者と、関連する双方の研究成果や視点について情報や意見の交換を積極的に行い、今後の関連研究の国際化に着実な一歩を進めることができた。

研究成果の概要(英文)：This research program focused on the literature, scholarship, and thought around the Ashikaga Shogun family which Zeami was active in, and made clear that Zeami's Noh treatises were deeply influenced by the cultures of Zen and Confucianism thoughts of that days, Heian literature and so on by pointing out many evidences, as well as these cultures were inseparably related to the formation of Zeami's thought on the performing art. Furthermore, the program treated the academic and educational circumstance in the society of Kyoto in those days, and the meaning of the beauty in the cultural nature around Ashikaga Shogun family, through the inquiry. Accordingly, it strengthens the conclusion, which I have held for many years, that the era of Ashikaga Yoshimochi was the beginning of typical Samurai culture as the aesthetic sense or thought, and also was the remarkable age for Japanese culture.

研究分野：日本文学

キーワード：世阿弥能楽論 足利将軍家 東福寺 禅 儒学 朱子学 連歌論 神道

## 1. 研究開始当初の背景

室町時代初期の足利将軍家側近の能役者であった世阿弥の能楽論における当時の学問・思想の投影について、研究代表者は、五山の禅や中国宋代以降の儒学など、将軍家やその周辺の学術・思想の影響について多少の見通しをもっていたが、具体的な調査・考察は行っていなかった。また、将軍家の中で足利義持の美意識や嗜好がとりわけ世阿弥の芸道思想形成の大きなきっかけとなったことに注目し始めていたが、考察の余地が大きかった。また、世阿弥能楽論の連歌論などの文芸との関係についても、従来十分に研究されていなかった。これらの状況を踏まえ、上記のテーマについて、多角的かつ具体的に行うことが必要かつ有用であるとの認識をもっていた。

## 2. 研究の目的

世阿弥の能楽論には将軍家とその周辺の文芸・学術・思想が投影しており、同人がそれを教授されまた教養として身に付けたことが知られる。本研究ではこのことに注目し、世阿弥能楽論の精読、及び当時の教養に関する各分野の文献参照により考察する。具体的には、将軍家周辺のどのような文芸・学術・思想の投影が同人の能楽論に見られるかを明らかにする。中でも足利義持の時代に重点を置く。同時に、それらの教養によって世阿弥がどのような芸論、芸の思想を築き、当時の能楽をはじめとする文芸・文化の一角を形成したかについて、解明を試みる。

## 3. 研究の方法

本研究の考察は、世阿弥能楽論の精読と、足利将軍家とその周辺の文芸・学術・思想や文化に関する文献資料・文化財資料の調査(国内外の出張を含む)・分析・読解により、歴史的な視点から考察を行った。具体的な考察内容は以下のとおり。

- ・世阿弥能楽論と五山僧岐陽方秀の学問、及び同人の禅の思想との関係
- ・世阿弥の演出論・作能論に関して、世阿弥活動期前後の幽霊能の制作史、及びその劇構造から見た分類、足利将軍家とその周辺の美意識との関係、「夢幻能」概念の再考
- ・世阿弥能楽論における『日本書紀』注釈の反映、吉田神道家の神道書との比較
- ・世阿弥能楽論に反映した『本朝文粹』所収「辨散楽」の用語及び思想(用語「舞歌」・儒教・道家思想)それにより形成された世阿弥能楽論の特徴
- ・世阿弥能楽論との関係の考察に必要な、「辨散楽」の校訂・解釈、芸道論としての考察
- ・世阿弥能楽論に反映する道学(朱子学・宋元の易学等)の用語と思想、またそれにより形成された世阿弥能楽論の特徴
- ・足利義持政権期の世阿弥の歌舞能志向への変化、同人の能楽伝書のそれに伴う改訂箇所
- ・世阿弥能楽論に漢文教育書『庭訓往来』が反映している可能性
- ・世阿弥能楽論と足利将軍家周辺における文化他ジャンル(連歌・花道・茶文化等)の芸道思想と芸道用語の比較
- ・足利将軍家の周辺から地方へと分化した能楽の流れである黒川能の武家文化としての特徴

本研究の成果の発信は、論文執筆・学会発表をはじめ、他の学術的文章の執筆や学術講演、マスメディアによっても行った。学術講演は米国・台湾における国際的な講演も含む。

国際的な活動として、米国・中国・台湾の日本・東アジア文化関連の研究者との学術交流により、相互の視点・成果に関する情報・意見交換を行い、国際的研究の活性化の一端を担った。

## 4. 研究成果

- (1) 論考「岐陽方秀と世阿弥の交流と「一」への意識——室町時代初期の東福寺を中心とした中国風の思想」(著書『禅からみた日本中世の文化と社会』所収)では、世阿弥との交流が指摘されていた当時の五山僧、岐陽方秀の詩文から、同人の思想として重要な維摩経由来の「不二」概念、及び中国呉越国の禅僧永明延寿の撰述書『宗鏡録』に由来する「一心」概念を取り上げ、道家思想の「一」重視との関連の深さを指摘した。また、世阿弥能楽論の「一心」概念も取り上げ、世阿弥が岐陽方秀などとの交流から『宗鏡録』や道家思想の影響を受け、それが同人の芸道思想を形成し、能楽論に反映していることを明らかにした。

また、岐陽方秀が本拠地とし大陸風の学問の場でもあった五山の東福寺に注目し、そこでは世阿弥のような身分の人物に対しても、禅や漢籍の教育が行われ、教育面で身分の壁を取り払う先駆的な役割を果たしていたことを、世阿弥能楽論の上記の具体例によって指摘した。

このように本論考では、『宗鏡録』の思想や道家思想の世阿弥能楽論への明確な反映をはじめて実証し、その思想・学術的背景に関する研究に大きな一歩を進めた。同時に、足利義持政権期の、禅や漢籍に関する学問の在りかた、特に東福寺の重要な役割について、教育という新たな視点から指摘を行い、関連研究に大きく貢献することができた。

- (2) 論文『「風姿花伝」神儀篇の成立経緯と著述の意図——「申楽」命名説を軸として』では、従来研究が十分でなかった『風姿花伝』神儀篇を取り上げて詳細に考察し、成立時期、伝書としての性格、世阿弥の執筆意図を考察・解明した。具体的には、同伝書が足利義持政権期の中頃に新たに著述されたことを検証し、またそこに反映する中国古典や神道関連の説を指摘し、その著述に知識人の協力があつたことを実証的に解明した。加えて、同伝書には世阿弥自身の文体とは認めがたい箇所が多見されることから、知識人の協力が素案の執筆にまでわたっている

たことを推測した。さらに、同伝書には猿楽が神代の「神楽」に由来することを強調するなど、それ以前になかった新たな芸道思想の傾向があらわれており、同伝書が従来考えられていたような単なる猿楽伝承の祖述ではなく、世阿弥の意図を反映して成立したことを指摘した。

このように、『風姿花伝』神儀篇への中国古典や中国古典的文体、神道関連説の反映という、従来なかった視点を提示し、中国古典読解も併せて行うことにより、世阿弥能楽論に関する従来の理解を塗り替え、同伝書の今後の関連研究の土台を作ることができた。

- (3) 論文「『本朝文粹』所収「辨散楽」の基礎的研究——本文校訂・解釈及びその藝能論的考察」では、『本朝文粹』所収対策文「辨散楽」の校訂・解釈及び藝能論としての考察を行った。

「辨散楽」は『風姿花伝』神儀篇の典拠であることが指摘されており、世阿弥能楽論研究には、同作品との内容的な比較考察が必要だが、平安朝漢文学の駢儷文「辨散楽」の内容が難解であることが理由となり従来行われてこなかった（「辨散楽」がどの程度難解かということさえ国文学研究分野では正確に把握されていなかった）。しかも、「辨散楽」自体の校注はきわめて不十分であり関連研究に用いることができない状態であった。そこで本論文では「辨散楽」を取り上げ、一からあらためて校注の基礎作業を行い、中国古典学の観点を活かして典故についての従来説を修正し、未解釈部分の解釈を試みたところ、本作品全体の主旨を読解することができ、今後の本作品に関する研究の土台を築くことができた。

また本研究により、従来具体的に行われてこなかった世阿弥能楽論『風姿花伝』の「辨散楽」との関係について、『風姿花伝』にあらわれた芸道思想には、「辨散楽」の踏まえた中国儒教經典『礼記』楽記に見える、芸能の社会的意義に関する思想などが反映しており、世阿弥の重要な芸道思想である「衆人愛敬論」形成の大きなきっかけとなっていることを突き止め、世阿弥の芸道思想やその学術・思想的背景への理解を一段と深めることができた。これについては本研究の一環として学会・研究会の口頭発表で指摘しており、その論文を発表し、世阿弥の芸道思想の理解へ向けて大きな一歩を進める準備が整っている。

- (4) 論文「中世後期初頭の藝道における「幽玄」の「花」との関係」では、従来多様なニュアンスをもつとされてきた「幽玄」の2種の基本的概念を解明し、及び足利義満文化圏における「幽玄」美の嗜好の特徴を指摘した。

世阿弥能楽論を含め、「幽玄」は日本の重要な美的概念であるが、その用例全体に通底するニュアンスがどのようであるかについての考察は少なく、しかもそこでは、“茫漠とした”“奥深い”の類の基本的意味だけが指摘されていた。それに対し本研究では、「幽玄」の基本的な意味はそのとおりであるが、それ以外の用法として、それとは対蹠的な「花」（花やかさ）の美が「幽玄」と同居する、視覚的な対象に用いる例（はんなりとした美を表す）が見出され、「幽玄」美には大別して前者と後者の2種の系統があることを明確に指摘した。

また、前者の本来の意味の用例は歌論・連歌論に多く、後者の用例も歴史をとおして散見するが、本研究でさらに指摘したのは、中世後期の足利義満文化圏ではそのように「花」の美と同居する視覚的な「幽玄」が好まれたことである。

このように本研究では、日本の美の概念としても世阿弥能楽論用語としても重要な「幽玄」の基本的意味を解明し、同時に、「花」と同居する系列の「幽玄」が、足利義満文化圏における美の嗜好の象徴と言いうることを指摘して、関連研究に大きく貢献することができた。

- (5) 論文「『花伝』から『風姿花伝』への書き替えに見る世阿弥の歌舞能志向——「舞がかり」と歌道の重視へ」では、足利義持政権期における世阿弥が、義持の美感覚と能の芸の嗜好に合わせて、旧来からの大和猿楽の強く武骨な「修羅」「神」「鬼」の芸を、「舞がかり」の芸へと変革しようとしたと推測し、『花伝』の世阿弥自身による改訂の問題と関連付けて論じた。

義持政権期は、本研究の他の考察で指摘したように、世阿弥が五山僧や知識人との交流により新たな芸道思想を形成し、世阿弥能楽論の内容も大きく変化した時期であるが、そのように当時の思想・学術的環境を便りに世阿弥が新たな芸道思想を築こうとした要因は、義持の、義満とは異なる美感覚や嗜好にあったことを、研究代表者は以前から指摘・推測してきた。本論文もその一環であり、同時にその時期の世阿弥能楽論の読解を深める役割をも果たしている。

また本論文では、世阿弥が『風姿花伝』完成の少し前に、漢文教育書『庭訓往来』に見える言葉を知識人から学んだ可能性も指摘しており、世阿弥の漢文に関する知識の範囲や、その学術的背景、教育環境の解明に向けて、地道な一歩を進めたものでもある。

本論文は本研究の他の考察のように世阿弥能楽論以外の文献を多く取り上げていないが、『花伝』から『風姿花伝』への書き替えの問題や、義満時代から義持時代への能の芸の変化など、世阿弥研究・能楽研究の上でも、従来とは異なる発想により、世阿弥能楽論の新しい解釈に大きく貢献している。

さらに、世阿弥の「歌舞」（舞歌）重視は、上記(3)で取り上げた『本朝文粹』所収「辨散楽」の「舞歌」に言及する内容がその論のきっかけを作ったのではないかとの推測を、本研究の学会口頭発表等で行った。本考察に取り上げた世阿弥の「歌舞」（舞歌）の概念は、その点でも重要である。本考察はこの点でも発展的な可能性を包含している。

- (6) 論文「「夢幻能」概念の再考——世阿弥とその周辺の能作者による幽霊能の劇構造」は、足利

将軍家とその周辺における美への意識や芸の嗜好が、世阿弥以前からの幽霊能の劇構造を大きく変え、寺院が主な上演の場であったそれ以前の幽霊能がもっていた宗教性が希薄になったという能の性質の大変化を、当時の幽霊能全体を網羅して考察、指摘したものである。

また 20 世紀以来、「夢幻能」という枠にはめられてきた曲目群が、実は共通の構造や要素をもつわけではなく、それらを「夢幻能」として一括することは学術的には成り立たないことを、各曲の劇構造に注目し指摘した。従来能楽への見かたを大きく変えた本論文は、日本文学や能楽の分野を超えて、様々な研究分野で参照されるテーマの広がりをもっている。

また上の幽霊能の作能史において、足利義持の美感覚や芸の好みがその変化に与えた影響は大きく、世阿弥などの能作者を、夢をプロットとする能（夢能）の多作へと向かわせたのではないかと推測した。夢能は劇構造の面から、義持時代の世阿弥能楽論にはじめてあらわれる「冷え」「さび」の美に通ずる性質をもつことに注目しつつ、このことを論じている。

このように本論文は、世阿弥能楽論と足利将軍家とその周辺の学術・思想との関係についての直接的な考察ではないが、それを異なる面から支える役割も果たしている。

- (7) 論文「王祇祭及び黒川能の形成と大宝寺氏の庄内統治—寺社藝能・武家権力・羽黒修験—」、論考「黒川能と鶴岡荘内神社—明治維新後に引き継がれる酒井家への勤仕」(『東アジア古典演劇の伝統と近代』)では、山形県鶴岡市に継承される黒川能を取り上げている。世阿弥能楽論とは少々距離のあるテーマであるが、本研究の足利将軍家とその周辺の武家文化について考察を進めるうちに、黒川能の考察にも及んだ。従来黒川能は、村の祭礼の芸能として位置付けられてきたが、武家政権と密接にかかわって生まれ存続してきた芸能でもあり、武家文化の一環として位置付けることができる。本考察では従来希薄だったそのような黒川能の性格を明確に指摘し、従来認識を大きく変え前進させることができた。

黒川能は元来、足利将軍家周辺から分かれて地方へ伝播した芸能が重要な一面を占めている。また従来指摘されていないが、本考察では、黒川能が江戸時代には藩の公式の能楽に位置付けられたと推測し指摘している。近代以降も、黒川能と藩主やその子孫との結びつきは強い。このように黒川能は、武家政権と密接に関連する点で世阿弥活動期の能楽と必ずしも隔絶するものではなく、むしろ武家文化の活きた資料として、世阿弥活動期の能楽の研究にも示唆を与えうる研究材料であることをあらためて認識したことも、本考察の副次的成果である。

- (8) 口頭発表「世阿弥能楽論に見る道学の反映—藝道思想の画期としての足利義持政権期」、論文「世阿弥能楽論に見る道学の反映—藝道思想の画期としての足利義持政権期」は、従来世阿弥能楽論との関係がほとんど顧みられなかった道学（ここでは朱子学を中心とする宋元儒学を指す）に注目したものである。世阿弥能楽論にそれがどのように反映しているかを具体的に指摘しながら、それが道学のうちのどの系統であったか、また世阿弥能楽論には道学以前の儒学も反映しているが、そこでは道学と道学以前の儒学がどのように混在しているのかなどについて、考察・指摘したものである。

また道学は、世阿弥能楽論の「心」と「身」との関係の論の形成に大きなきっかけを与え、「花をきわめる」「能を知る」など、抽象的なものを「知る」「きわめる」と表現する説の由来であると指摘し、世阿弥の芸道思想の形成に関して、従来見かたを画期的に進展させる結果となった。さらにその類の言説は、それ以後の芸論・芸道書の類にもあらわれる点に気づいたことも、本研究の大きな収穫である。このように本研究は、足利義持政権期の道学が、能楽以外の室町文化の芸道思想形成に大きな役割を果たしたことを解明した先導的研究である。

- (9) 世阿弥能楽論をはじめとする足利将軍家周辺の芸道書の用語の考察

短文論考や研究会の報告等で少しずつ積み重ねて行った考察である。「花」「かかり」「陰陽」等々、世阿弥能楽論ばかりでなく、他の諸芸の芸道書にも共通または類似する用語が見られる。それらの用語を諸ジャンル横断的な視点から、相互の共通点・相違点を比較考察した。

また能は、今日の日本文学研究や能楽研究では演劇（または芸能）の一種ととらえられることが多い。しかしそれとは別に、能楽論や芸の思想の存在に着目し、能を芸道ととらえることにより、足利将軍家との関わりが深い文化に共通する性質や思想を見出すことができる。本研究により、そのような諸芸・芸道の相互横断的な、新しい方向性を展望することができた。

- (10) 本研究に関する国際的な学術交流として、マサチューセッツ州立ブリッジウォーター大学（米国）、南京大學（中国）、臺灣師範大学（台湾）に赴き、本研究に関する講演や、本研究及び関連研究に関する相互の情報・意見交換を行った。そのほか、ヴェルツブルク大学（ドイツ）、ウィーン王立民族博物館（オーストリア）、中央研究院（台湾）等の研究者と情報・意見交換を行い、本研究の考察に役立てることができ、今後の関連テーマの国際的研究の地盤を築いた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 10 件)

重田みち「『風姿花伝』神儀篇の成立経緯と著述の意図—「申楽」命名説を軸として」

『日本研究』(国際日本文化研究センター) 58、pp.51-79、2018 年、査読有り

doi/10.15055/00007033

- 重田みち「『花伝』から『風姿花伝』への書き替えに見る世阿弥の歌舞能志向—「舞がかり」と歌道の重視へ—」、『演劇研究』41、pp.1-16、2018年、査読有り
- 重田みち「中世後期初頭の藝道における「幽玄」の「花」との関係」、『いけ花文化研究』(国際いけ花学会)5、pp.25-38、2017年、査読有り
- 古勝隆一(連携研究者)、岩井茂樹・永田知之・白石将人・山口智弘・重田みち・田訪・藤井律之・宇佐美文理(順番:2番目。古勝隆一以外は著者同等並列)、『文史通義』内篇二譯注(1)、『東方學報』(京都大學人文科學研究所)92、pp.253-311、2017年、査読有り
- 重田みち担当:「原學上」「原學中」、pp.283-291
- 古勝隆一(連携研究者)担当:pp.253-311(全体)
- 重田みち「王祇祭及び黒川能の形成と大宝寺氏の庄内統治—寺社藝能・武家権力・羽黒修験—」、『藝能史研究』219、pp.1-28、2017年、査読有り
- 重田みち「『本朝文粹』所収「辨散楽」の基礎的研究—本文校訂・解釈及びその藝能論的考察—」、『京都造形芸術大学紀要』(GENESIS)21、pp.47-57、2017年、査読有り
- 重田みち「「夢幻能」概念の再考—世阿弥とその周辺の能作者による幽霊能の劇構造—」、『人文學報』(京都大学人文科学研究)109、pp.143-184、2017年、査読有り
- doi/0.14989/216258
- 古勝隆一(連携研究者)、福谷彬・陳佑眞・内山直樹・道坂昭廣・竹元規人・渡邊大・土口史記・廖明飛「『文史通義』内篇一譯注」、『東方學報』第91冊、2016年12月、pp.149-236
- 古勝隆一担当:pp.149-236(全体) 査読有り
- 古勝隆一(連携研究者)「『日本見在書目録』中所著録之《春秋公羊解微》」,石立善主編《古典學集刊》1、華東師範大學出版社、pp.477-486、2015年、査読有り
- 古勝隆一(連携研究者)「『論語』と日本—『論語集解』『論語義疏』の傳承を中心として—」、『*Journal of East-West Humanities*』3( ) (The Academy of Humanities, 大韓民國慶北大學校人文學術院)編、pp.91-109、2015年、査読有り

[学会発表](計 4 件)

- 重田みち「世阿弥能楽論に見る道学の反映—藝道思想の画期としての足利義持政権期—」日本思想史学会2017年度大会、2017年
- 重田みち「世阿弥の「舞歌」「遊楽」概念と『風姿花伝』完成期以降の藝道思想—「本朝文粹」「弁散楽」と世阿弥の藝論との比較—」平成28年度中世文学会秋季大会、2016年
- 重田みち「遊行僧が登場する世阿弥周辺の幽霊能の劇構造—足利將軍家文化圏に求められた能の趣向—」能楽学会2015年度大会、2015年
- 重田みち「黒川能の起源と武家政権に関するいくつかの問題—黒川能の近代以前の歴史と性格再考—」藝能史研究会2015年4月例会、2015年

[図書](計 4 件)

- 古勝隆一(連携研究者)『目録学の誕生—劉向が生んだ書物文化—』(京大人文研東方学叢書6)単著、臨川書店、268ps.、2019年、ISBN:978-4-653-04376-8
- 毛利三彌・天野文雄編、山路興造・重田みち・野村伸一、他10名(執筆者同等並列)『東アジア古典演劇の伝統と近代』、勉誠出版、全258頁、2019年 ISBN:978-4-585-22698-7C1374
- 担当:「黒川能と鶴岡荘内神社—明治維新後に引き継がれる酒井家への勤仕—」pp.38-51
- 古勝隆一(連携研究者)・宇佐美文理・永田知之『目録学に親しむ—漢籍を知る手引き—』(京大人文研漢籍セミナー6)研文出版、134ps.、2017年、ISBN978-4-87636-420-6(執筆者同等並列)古勝隆一担当:pp.1-48; pp.121-132
- 天野文雄監修、執筆者:中本大・太田亨・重田みち、他計21名(執筆者同等並列)『禅からみた日本中世の文化と社会』、ペリかん社、全406頁、2016年 ISBN:978-4-8315-1439-4C1015
- 担当:1)天野文雄、末木文美士、重田みち、他7名(執筆者同等並列)「【座談会】禅とは何か—末木文美士氏に聞く—」pp.5-42
- 2)「岐陽方秀と世阿弥の交流と「一」への意識—室町時代初期の東福寺を中心とした中国風の思想—」pp.247-264

[その他]

- 短文学術論考(計 5 件)
- 重田みち「禅と能—《放下僧》の周辺—」、『国立能楽堂』417、pp.22-25、2018年、依頼原稿
- 重田みち「「かかり」とは何か—良基連歌論と世阿弥能楽論—」、『鍔仙』679、pp.4-5、2018年、依頼原稿
- 重田みち「「夢幻能」のフィルタを外す—世阿弥晩年期以降の幽霊能のヴァリエーション—」、『鍔仙』671、pp.3-4、2017年
- 重田みち「世阿弥伝書の謡に関する記述の読みかた—《融》《関寺小町》《松風》《雲林院》

の作能をめぐる私見」、『鍔仙』658、pp.4-5  
重田みち「幽霊能の「旅僧」の性格 遊行、救済する僧を何と呼ぶか」  
『鍔仙』646、pp.4-5、2015年

口頭研究報告(計 11 件)

重田みち「歌論・連歌論・能楽論の「かかり」」、藝道研究会例会、2018年2月  
重田みち「能伝書の「陰陽」」、藝道研究会例会、2018年1月  
重田みち「世阿弥能楽論に見る道学の反映—藝道思想の画期としての足利義持政権期」  
国際日本文化研究センター共同研究:「比較のなかの東アジアの王権論と秩序構想—王朝・帝国・国家、または、思想・宗教・儀礼—」(研究代表者:伊東貴之)、2018年1月  
重田みち「藝道書における「花」第四回 禅竹の能伝書『歌舞髓脳記』における「花」」  
藝道研究会例会、2016年11月  
重田みち「世阿弥伝書の「花」の用法と「花」の論の特徴—他藝道書との関連に注目して」  
藝道研究会例会、2016年9月  
重田みち「藝道書における「花」—花と玉を尋ね求める」、藝道研究会例会、2016年7月  
重田みち「『文史通義』原學中」、京都大学人文科学研究所研究班「『文史通義』研究」  
(班長:古勝隆一、連携研究者)、2016年7月  
重田みち「『文史通義』原學上・中」、京都大学人文科学研究所研究班「『文史通義』研究」  
(班長:古勝隆一、連携研究者)、2016年6月  
重田みち「世阿弥能楽論に見える藝道関連の記述 その一」  
藝道研究会例会、2015年10月  
重田みち「藝道研究に世阿弥の藝論を活用する際にどのような点に注意すべきか—「幽玄」  
に注目して—」、藝道研究会例会、2015年9月  
重田みち「藝道書の用語・スタイルの問題—中世後期の藝道書を題材として—」  
藝道研究会例会、2015年4月

翻訳協力(計 2 件)

翻訳:澤井義次・金子奈央・古勝隆一(連携研究者)・西村玲『井筒俊彦英文著作翻訳コレクション 東洋哲学の構造』、慶応義塾大学出版会、全534頁、2019年、担当:第6-8章、pp.255-372  
翻訳協力 重田みち、担当:第6-8章、pp.255-372  
翻訳:古勝隆一(連携研究者)『井筒俊彦英文著作翻訳コレクション 老子道德経』  
慶応義塾大学出版会、全252頁、2017年  
翻訳協力 重田みち、担当:「序 老子と『道德経』」、pp.3-16

講演(計 2 件)

重田みち「日本中世的藝道」(日本中世の芸道)  
国立臺灣師範大學東亞學系:東北亞文化精神史(台湾) 2018年5月3日、招待講演  
重田みち「Exploring the Syncretic Nature of Warrior Culture: Sophisticated and Subtle Beauty in Medieval Japan」、Bridgewater State University(米国・マサチューセッツ州立ブリッジウォーター大学); 2016年2月4日、招待講演

テレビ・ラジオ出演解説(計 2 件)

重田みち、NHK「FM能楽堂 謡曲「自然居士」~観世流~」、2018年2月18日、招待有り  
重田みち、NHK教育テレビ「古典芸能への招待」  
「太鼓一調《誓願寺》・狂言《鶏猫》・能《綾鼓》解説、2015年9月27日、招待有り

ホームページ等

重田みち researchmap: <http://researchmap.jp/MichiShigeta/>

## 6. 研究組織

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名: 古勝 隆一

ローマ字氏名: KOGACHI Ryuichi

平成 27-29 年度

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。